

子ども学とは何か（3）

——道徳と宗教の規範性について——

黒田敏夫

はじめに

現在、日本では特に家族の絆、地域のつながり、国家へのアイデンティティーの欠如が問題にされている。思想的に見ても、近代以降、近代的自我の確立や個人主義の流れが顕著になっていくに従って、個人の全体への帰属意識が弱まってくることは必然の流れである。長子制の廃止、核家族化の進行により、家族のつながりや地縁・血縁関係の希薄化、戦前のような愛国心の衰退は当然の流れといえよう。しかし、この流れを好ましいと考えるものは少ないだろう。社会的存在である私たちは、常に家族の在り方、地域のコミュニティの在り方、市民社会のあり方について考えていく必要がある。

人と人のつながり、個人と社会のつながりを宗教哲学的、哲学史的、法的な考察によって、規範性という個人の意識や社会の力を分析し、整理してみようとするのがこの小論の試みである。

—

人類の長い歴史を哲学史的に眺めてみると、人間が狩猟生活から農耕生活に移っていったことから、家族など血縁的なつながりで人々がつながっていたと考えられる。また、農耕生活に移っていくなかで、定住することにより地縁的なつながりがつよくなっていったと考えられる。

初め、人間は神話的思考の時代を過ごすのであるが、そこでは血縁的・地縁的なつながりと宗教的支配と力による支配によって、集団が形成されていたと考えられる。神話的思考の時代では、これらのつながりも支配も十分な普遍性をもっているかどうかの理性的反省は加えられなかった。この神話の時代の次にくるのが、神話的思考を哲学的に反省していく時代である。野田又夫氏¹によれば、「哲学の最初の源となった地域は、紀元前六、七世紀以後のギリシャ乃至東地中海ばかりでなく、同じ時期の北インドのガンジス河地方、中国の黄河の流域の二つの場所²」であると指摘している。つまり、ギリシャの自然哲学、インドの仏教やジャイナ教、中国の孔子を初めとする諸子百家の思想がそれにあたる。ここに西洋哲学と東洋哲学の源流を見ることができるのである。その場合、西洋哲学が論理学や数学に基づいて哲学的反省をしていったのに対して、東洋哲学は宗教的色彩を残しながら神話的思考を批判していったのである。規範意識についても、当然西洋思想の流れは、理性的色彩を特徴とするのに対して、東洋哲学は宗教的、情緒的な側面がつよく残っている。

古代ギリシャ哲学以来の方法であるが、人間の能力を「知」「意志」「感情」と3つに区分して考えるのが一般的となっている。そして規範的意識がどの能力に関係するかを考察してみると、規範意識についての理解を深める上にも、また教育の上にも意味があると思われる。

ところで規範意識という言葉を知ると道徳観や倫理観と関係すると思われる人も多いだろう。戦前に教育を受けた者は道徳教育としての『修身』の授業を連想するであろう。戦後の民主教育によって日本人は愛国心を失い、自虐的な歴史観を押し付けられたと主張する保守派の国会議員やマスコミに登場する評論家たちも声高にそれを叫んでいる。第二次世界大戦を経験し、世界で唯一の被爆国として、戦争の悲惨さをどの国よりも経験している日本人は、冷静に日本人にとっての愛国心とは何か、人間にとって祖国を愛する感情とはどのような感情なのか、私たち人間が何よりも大切に守るべき心（知、情、意）は何なのかを、今一度、一歩退いて（メタに）考えてみる必要がある。

また、道徳意識を根底から支えているものは宗教的なものであるといえる。例えば、旧約聖書の時代のモーセの率いるユダヤ民族は、神から与えられた「十戒」を守ることが厳しく求められた。神が与えた戒めであるが故にユダヤ人にとっては絶対に守らなければならないものなのである。神への信仰は「十戒」を守ることによって示され、それに従って神はユダヤ民族に平和を約束されるのである。そして、十戒を破るものは神から罰せられるのである。このように神と民族の関係に基づき、人間同士の関係も成り立っていく。

次にキリスト教について、イエスの時代を見てみると、当時、イスラエルはヘロデ王によって治められており、同時にローマの植民地として、二重の支配を受けていた。ファリサイ派やヘロデ派がイエスをおとしめようとして、「皇帝に税金を納めるのは、律法にかなっていないでしょうか。」³と問う。イエスは彼らの、した心を見抜いて、デナリオン銀貨の肖像を示して、「これは、だれの肖像と銘か」といわれる。彼らは「皇帝のものです。」と答える。すると、イエスは「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい。」⁴といわれた。このように、イエスはこの世の権力と神の権力は異なっていることを示す。しかし、それは、神への信仰はこの世のいかなる権力にも屈するものではないことを、同時に示したのである。

近代以降のキリスト教を見てみよう。マックス・ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』⁵が我々に大きな示唆を与えてくれる。一言でいうと、資本主義の発展を支えたのはプロテスタンティズムだということだが、そのつながりをヴェーバーは独特な視点から詳細に分析して説明するのである。つまり、キリスト教徒はその倫理観により、職業を天職（Beruf）として受け止め、近代資本主義を発展させていったということである。ヴェーバーは、暫定的に「資本主義の精神」を「正当な利潤を Beruf『天職』として組織的かつ合理的に追求するという心情」⁶と定義をする。プロテスタンティズムの倫理とは一般に「規範」や「教義」を意味するのであるが、ヴェーバーは「エートス（Ethos）」という言葉を使って、「資本主義精神」と「プロテスタンティズム倫理」を独特な仕方でも的に結びつける力と考える。キリスト者の倫理とは、すなわち、勤労、質素、周到、信用といった諸徳性を含んだ禁欲的な倫理である。更にそれが血肉化したものが「エートス（Ethos）」であり、それは人々を内側から行動へと動

かしていく起動力 (Antrieb) なのである。利潤を求めること、すなわち営利活動を倫理的義務や「天職 (Beruf)」と考える思想はルターの影響がある。「信用できる正直な人」という理想、「自己の資本を増加させることを自己目的と考えることが各人の義務である」という思想、「世俗的義務の遂行こそが神に喜ばれる唯一の道であって、これが、そしてこれのみが神の意志であり、したがって許容されている世俗的職業はすべて神の前ではまったくひとしい価値をもつ」⁷ という思想である。ルターの「天職」の倫理は営利活動を促してだけでは不十分であり、資本の増大を絶えず求めるためには、カルヴィンの禁欲思想が必要だったといわれる。救いの証しを見出すために、人々は禁欲的に、ひたすら世俗の営利活動に勤しんだのである。ところで「禁欲」ということは、大塚久雄氏が訳者解説で述べているように、非行動的な禁欲ではなく、「行動的禁欲」(active Askese) であり、「たいへんな行動力を伴った生活態度あるいは行動様式」⁸ なのである。このように、ヴェーバーは資本主義精神を作り出していったのが、「エートス (Ethos)」としてのプロテスタンティズムの倫理であると説明するのである。

宗教的規範は古代から現代に至るまで大きな課題をもってきた。宗教といっても、すべて同じではなく、神性が世界に遍く潜在しているとする汎神論的な宗教とユダヤ教やキリスト教のような一神教では内容がかなり違う。しかし、人間は「聖なるもの (das Heilige)」を求め、それに「感情的」に依存する存在であるので、「聖なるもの」からの命令は絶対的であり、その規範力は永遠性と絶対性をもっている。人間は環境によって、影響を受け変化していく存在であるが、人間の宗教性は生きていくための利益を犠牲にしても、その自然や環境の影響に逆らう力を示すことがある。しかしヴェーバーの言うところの、資本主義精神を作っていた「エートス」としてのプロテスタンティズムの倫理はキリスト教にとって非本質的な方向へ人々を駆り立てていったのである。

宗教には信仰者が陥る落とし穴があることを信仰者は忘れてはならない。自分は神の前で正直な人間でありたいと思っている。それ故に、神を疑うこと、人を疑うこと、それ自体が罪であると思ってしまう。正直であること。自分に与えられた賜物 (タラント) を有効に使うこと、それを増大させていくことは我々の勤めであり、疑わず勤勉であることは信仰そのものであると思ってしまうのである。こうなると様々な視点からものごとを考えることはできなくなり、十分な自己吟味や自己批判もできなくなる。このようなこともキリスト者の生活態度が資本主義精神の形成に寄与したと考えられる。

今日、キリスト教が世界宗教として普遍性をもつのは、以下のような特質をもつからである。

1. 神への愛を説く。2. 隣人への愛を説く。3. 人間の罪を説く。4. 悔い改めと救いの約束を説く。つまり、隣人への広い愛を説き、人間の罪と人間の救いを説くということは、宗教哲学的な表現を使うと、自己否定と自己肯定、否定を媒介とした自己肯定を説いているところに世界宗教の共通点があるといえる。このような宗教が求める規範性は同時に普遍性を持ち、社会性をもっているのである。それに対し、自己否定を伴わず、安易な自己肯定のみをうたう宗教はカルト的な宗教になるか、快樂主義的な宗教になるといえる。

二

次に道徳的規範について、ドイツの哲学者イマヌエル・カント (Immanuel Kant) の哲学を通して考えてみよう。有限な人間に価値を与えるのは、絶対的な神か客観的な人間理性かである。カントにあっては、人間理性を絶対的に信頼しているという前提があるが、道徳哲学の一つの偉大な学説である。

カントの道徳哲学を学んでいくと、宗教的規範 (命令) と道徳的規範 (命令)、法的規範 (命令) の違いが明らかになる。例えば、宗教的命令は信仰者にとっては絶対的であり、それに違反することは、その宗教が約束する救いにあずかれない程に絶対的な意味をもつ。法的命令は、市民社会の一員として、民主的に制定された法 (国民が選んだ代表者が制定した法律、つまり国民が作った法) に自ら従うことが求められる。国家生活を送る国民は何をしてもよい、というような無制限な自由は認められない。その代わりに、国家は何よりも国民の生命、自由、財産を守らなければならない。国民は法の命令にしたがわなければならない、違反すれば罰せられる。このように、宗教と法、道徳と法、国家と法というように、人間と法、法的命令、規範との関係で考えると宗教、道徳、国家の本質が分かりやすくなる。カントは道徳法則と人間の関係で道徳を考えている。カントにおいては、人間はすべて理性的存在である。人間理性の本質は自由であり、理性の産物 (ein Produkt der Vernunft) としての道徳法則があるのである。理性自身が道徳法則を作ったのである。更に、自己が作った法に、自己の自由意志により自己自身が従う自由を自律 (Autonomie) の自由とカントは呼んでいる。自己が定立した法に自ら主体的に従うという法遵守の精神を表わしている。国家生活を営む私たちは法を犯す行為をすれば罰せられる。人としての道を守るため、人と人の正しい関係、人と社会の正しい関係を保つためには法律とは異なった理 (ことわり) がある。これが道徳である。あくまでも主体の立場から普遍的な道徳論を展開しようとすればカントのような道徳論になるであろう。自己の行為や意志の純粋性を吟味するということは、どんな場合においても必要である。宗教のところでも言ったように、否定を媒介にした自己肯定というような弁証法的な契機が私たちの自覚のなかになければならない。道徳論も、一つの思想であるので、厳しい自己否定と自己吟味がないかぎり優れた思想とはならない。

三

国家生活を営んでいる私たちにとって、宗教的行為や道徳的行為は、当然、日常生活の中に含まれている。人の行為には、法の下にある生活、市民として、してはならない行為、神の前に恥じない行為、人としてとるべき行為、自分自身の良心に恥じない行為、他人に迷惑をかけない行為、他人に喜んでもらえるような行為などがある。全ての行為は何らかの規範の下にある。

古い社会においては、宗教的支配者と政治的支配者が同一であったという現象がみられる。戦

前の日本においても、国家神道の頂点にある天皇が、同時に国家の元首であるという体制を経験した。法的規範が外的規範となり、宗教的規範が内的規範になるならば、何よりも大きな規範となり、国民を誤った方向に導いていくこともある。それ故に民主国家においては政教分離がうたわれるのである。宗教が感情的なものであり、法が理性的なものであるならば、徹底的な区別が必要であり、わけもわからず同一のものになるときに大きな過ちを犯すのである。戦前の道徳教育である「修身」は、古今東西の偉人らの逸話を通して、努力、忍耐、責任、公益、勤勉などの徳目を学ばせ、人格を養おうとする教科であった。これも、結果として「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」と似たような構造で、天皇制の下で、「日本人の道徳」と「軍国主義」を結びつけた要因になったといえよう。

法と道徳の関係も密接である。社会生活において、法的規範が少なく、安全で快適な生活が送れるならばそれが一番である。それは、市民一人ひとりがモラルを持ち、自発的に行動できる場合にのみ可能である。このように道徳は法律を補完しているといえる。道徳を意志的なものと考えれば、自由な意志で行動できることこそ、満足のできる生き方である。逆にモラルが徹底できないとき、法的規範の助けをかりないと、道徳の向上が期待できない事態もある。シートベルトを着用することは、自分の命を守るために必要なことである。これは法的というよりモラルの問題であると思えるが、徹底することはできなかった。法的に規制することでやっと守られるようになり、交通事故死亡者が減少したという。本来は法的規制ではないほうが良かったが法的規制にしてやっと守られるようになった例である。このように法と道徳は深い結びつきがある。

人間の能力は、一つの総体として働いているが、あえてそれを、知性（理性）、意志、欲求（感情）と三つに区分し、それぞれに法、道徳、宗教を当てはめて考えてみることは意味がある。つまり人間は法的存在であり、同時に道徳的、宗教的な存在である。人間の成長は理性、意志、感情においてのトータルな成長がなければならない。このように道徳の領域は総合的・総体的なものである。更に道徳は具体的なものとして考えなければならないが、その時、常に、「道徳とは何であるか」という問いを伴わなければならない。

註

- 1 野田又夫 『哲学の三つの伝統』 筑摩書房 1974年 74頁
- 2 同上 74頁
- 3 マルコによる福音書 12章 14節
- 4 同上 12章 17節
- 5 マックス・ヴェーバー著、大塚久雄訳 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』 岩波書店 1991年 12月
- 6 同上 72頁
- 7 同上 110-111頁
- 8 同上 400頁